

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	日本統治期台湾の映画文化受容に関する史料およびインタビュー調査
氏名 Name	原口直希
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	人間・環境学研究所・人間・環境学専攻・修士2年
渡航国 Country	台湾（中華民国）
渡航日程 Travel schedule	2024年2月16日～2024年2月29日（体調不良のため急遽3月5日から変更）

- ・ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- ・写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- ・各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- ・日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本調査では、日本統治期台湾の映画文化受容に関する史料調査とインタビュー調査を行う。

まず史料調査に関しては、日本統治期を通して最大手紙であり続けた新聞『臺灣日日新報』、および台湾人資本の新聞『臺灣民報』が基本となる。台湾では日本からはアクセス不可能な両紙のデジタルデータベースが複数存在し、本調査ではそれらへのアクセスを試みる。具体的には、以前の留学中にそれらすべてへのアクセスが可能であることを調査済みの台湾大学図書館、およびその近郊に位置する台北市立図書館において調査を行う。

それに加えて、共に台湾人資本の地方紙『昭和新聞』と雑誌『風月報』を中心に、映画に関する記載の多い雑誌の『台湾公論』と『台湾婦人界』についても調査を進める。これらは復刻版の出版などもなく、台湾においても等閑視されてきた史料ではあるものの、既に筆者はそれらが台湾大学図書館、および国立台湾図書館に所蔵されていることを確認している。

次いでインタビュー調査に関しては、既に筆者が知遇を得ている台湾少年工の東俊賢氏、林廷彰氏、および日本語世代が集まる友愛会、第三高女同窓会において行う。戦後の台湾では長らく中国国民党の革命史観に基づく歴史記述以外は許されず、さらに戒厳令解除後も人々の警戒心は強く、日本統治期経験者によるオーラルヒストリー研究が増加するのは2010年代以降の事であった。しかしながらその時期、経験者の多くは既に90代以上の高齢であり、インタビューの確保は困難になっていた。2024年現在、その困難は増加しているものの、筆者は複数の日本統治期経験者の知遇を得ており、本調査ではそれらの方々に対してインタビューを行う。皆、95歳を超えてはいるものの記憶は鮮明であり、また申請者はインタビュー調査を核として社会調査士資格を取得しているほか、対象者が用いると予想される台湾語、日本語、中国語の3言語にも精通しており、コミュニケーションにおける問題はない。なお高齢のため体調不良など不測の事態により上記3名への調査が難しい場合には、対象をその他の知遇を得ている経験者に変更するなど、臨機応変に対応する。

調査拠点としては、留学を経験し、研究環境に精通している台湾大学図書館を中心とする。2月19日の新学期開講以降、台湾大学図書館は祝日を除き、平日の8:00-22:00、土日の8:00-17:00まで入館可能ではあるものの、筆者が必要とする史料は特殊史料に分類され、公開時間が平日の9時から17時に限られている。そこで同時間帯は特殊史料に当たり、それ以外の時間帯は他の史料に当たる。

成果 Outcome

史料調査に関してはおおむね良好であり、『義人呉鳳』や台湾語流行歌《桃花泣血記》、日本統治期の台湾人映画人に関する新聞記事は網羅的に調べることができた。特に『義人呉鳳』に関しては、その作品が長唄、歌劇、琵琶歌、歴史劇などに翻案されながら受容されていた実態に関してかなりの程度の資料を集めることができた。これらの史料を、日本国内に所蔵のある『映画教育』などの雑誌記事と合わせて読み解くことで、その特徴的な受容の様相が明らかになるはずである。現在は、今回の調査結果をもとにした学会発表の準備

を進めている。

また《桃花泣血記》に関しては筆者の仮説を裏付ける当時の言説に関する史料を入手することができた。そのためこれに関しては、日本映像学会第50回全国大会における発表の準備を進めている。

インタビュー調査においては、インタビュイーが高齢のために体調を崩しインタビューを行うことのできない事態が発生した。そのため予定を変更して、東俊賢氏以外に、第三高女同窓会で知り合った邱玲玉氏へのインタビューに切り替えた。事前に想定した通り、日本統治期に台北以外の地方に暮らしていた方からは、既存の研究では言及のない貴重な内容が語られた。確かに同時代の日本人はおしなべて台北に集住する傾向があり、地方都市の大半は台湾人が圧倒的多数となっている。そのため台湾人の文化という点では地方都市こそが重要である。今回インタビューを行った東俊賢氏は地方都市台南の郊外で生まれ育った方であり、邱玲玉氏は桃園の八徳という伝記も通らないところで暮らしていた。そうした方々から語られる映画文化は台北のものとは異なるものであった。特に気になったのは台南における台湾人御用達の映画館大舞台に関する部分である。ここには台北に関して語られてきた既存の映画館に関する言説とはやや異なる部分があった。

そのほか、日本国内の所蔵が限られ、また台湾においても絶版となっていた複数の研究書を購入し持ち帰ることができた。

一点反省点として、筆者自身が体調を崩し、またパスケースなどの盗難にも遭い、急遽帰国を5日ほど早めることとなった。不慮の事態とはいえ、この点は深く反省している。

今後の展望 Prospects for the future

既述の通り史料調査はおおむね順調であり、今後は台湾語流行歌《桃花泣血記》に関して、日本映像学会第50回全国大会における発表と論文投稿を予定している。また、『義人呉鳳』に関しても学会発表と論文投稿を予定しているが、こちらに関しては台湾における中国語での発表と、台湾の学会誌への投稿を考えている。

またインタビュー調査に関しては、葉龍彦や李道明が進めた台北中心の映画館論に新たな一面を加えるものとして、地方都市中心の映画館論として研究を進める予定である。それはまた、新聞に関する李承機『台湾近代メディア史研究序説：植民地とメディア』（2004年）に代表される、同時代のマス・メディア論に新たな一面を加えることにもなるはずである。